

大和茶の現況と

肥 培 に つ い て

奈良県農業試験場
茶 業 分 場 長

今 西 実

1. はじめに

我が国の茶栽培は、東北地方の一部を除き、経済的作物として、栽培されているのは、茨城県以西の太平洋岸と、九州全域である。紅茶は消滅し、緑茶生産を行っている。世界的には、インド、スリランカを中心に、大部分が紅茶で、年間約150万トンと推定されている。

日本の茶業は、面積約6万ha、荒茶生産量10万トンを越え、他の農産物同様、産地間競争と、生産過剰が指摘されている。

表1 主要茶生産県における茶園面積と荒茶生産量

項目 府県名	10a当り 生葉収量	荒 茶 生 産 量	茶 栽 培 面 積	製 工 茶 場
全 国	870kg	104,738kg	60,000ha	13,600
埼 玉	525	3,056	3,340	465
静 岡	1090	51,139	21,800	6,220
三 重	938	7,564	4,020	941
京 都	903	3,137	1,690	1,310
奈 良	1250	3,924	1,420	706
福 岡	721	2,125	1,580	270
鹿 児 島	919	12,329	7,210	697

(53. 統 調)

主要茶生産府県は表1の通りであるが、適地の選定が絶対条件と云われながら、各産地の荒茶が茶問屋に買いとられ、切断、分離という作業を経て、合組みといわれる混合作業により、一般家庭の消費嗜好に合致したお茶に仕上げられる。

この商品特性が、価格を維持し、農家の意欲となって製茶工場の整備、茶園の改植が盛んに行われている。従って、茶園の肥培に当っては、単に施肥量、肥料の種類、価格ではなく、茶の地域特性、製茶品質、生産目標に合ったものでなければならないと思われる。

2. 大和茶の現況

大和茶の歴史は、平城天皇大同元年(806年)弘法大師が唐から茶の種子を持ち帰り、室生寺の近く、アカバナの里に播種させたのが始りと、伝承されている。(宇

陀郡榛原町赤植 仏隆寺)その後室町時代には、東大寺周辺の茶園が古文書に現れるが、現在の経済茶園の基礎は、奈良県の東北部、京都、滋賀、三重の府県境に位置する大和高原地帯に栽培されてからである。

この地域は、標高250~550mの山間傾斜地と称せられる高冷地で、良質茶の生産に適している。現在、茶園面積は1526ha、荒茶生産量3452ton、産地別表一2の通りである。製茶工場は679工場、そのうち113工場は、共同製茶工場の形態をとっている。

これ等の特徴は、10人前後の共同組織で、1工場対象面積は、茶園10~13haである。製茶機械の大きさは、60K型2ラインを中心とし、個別生産方式により、工場運営を行っている。

個別の最大原因は、山間傾斜地の立地条件、気象条件から来る生葉の格付にある。つまり、品質格差があまりにも大きく、合葉製造による価値判断が出来ない要因があるからである。

共同の機械を使って、個別に荒茶加工を行い、茶取引所において、別々に入札販売される。一番茶で1000円以上の価格差は普通である。産地農協の間にも格差が見られるのは当然である。

3. 大和茶の将来

80年代に向っての奈良県茶業の課題は、経営の合理化を行いながら、上級茶産地としての銘柄を確立することである。これが生産過剰時代に対処する方策であり、嗜好の変化を考え、安定した緑茶の生産を考えたいものである。

現在、近畿農政局により、大和高原北部総合農地開発事業が行われ、茶を基幹作物として、550haの造成と、ダム建設が行われている。

茶農家の安定的発展のための規模拡大であり、昭和40年から始った第一次構造改善事業、第二次構造改善事業により、奈良県の茶園は増殖され、共同製茶工場も、前述のように整備された。

今後、更に80年代に向って発展するためには、地域全体の整備が考えられるが、既に月ヶ瀬地域では、高度農

業生産モデル事業が発足し、その他においても、地域農業構造改善事業が始められている。

品質の主体をなすものは、製茶技術に移行しつつあるが、製茶工場は更に大型化、システム化が進み、120 K型を中心としたプログラム製茶工場と、圃場の整備、流通の一層の合理化が必要になると思われる。

4. 茶園の施肥と荒茶の品質

奈良県の茶園は40年代、急激に造成され、品種茶園(大部分やぶきた種)が増加した。このことは、若園が多く、成木園でも10年前後とみられる。つまり、特殊な要因(過湿、低温、病虫害)がない限り、茶園は大変元氣な状態にあると想像される。

このような茶園を対象に、茶農家が経済性を考える場合、それは収量と品質の関係である。多く採るべきか、少なくすべきか、相関性は高いが、逆の關係に作用することである。

収量を多くすると、品質が低下する。価格の変動差が問題である。一方、品質について常に認められている要因がある。それは生葉のN含量である。つまり、施肥技術によって品質が左右されることは、農家にとって重大な関心事である。

近年、各府県の指導機関も大体、同様の施肥設計を示すようになった。いずれも基肥中心で、緩効性肥料、有機質肥料を利用し、目標とする茶の生産指標としている。またその考えの中に、蓄積養分の転移の考え方が導入されている。

一般に施用量の基準は、年間10a当り成分量で示されている。N=80~100kg, P=30~40kg, K=30~40kg, 土壌のpHは4.0~5.0, 年間4~5回に分施を行い、敷草施用が慣例化するようになった。

使用する肥料の形態は、Nではアンモニア態が多く、硝酸態のものは少ないが、一定ではない。また液肥、或は粘状と固型等、固定していない。優秀な茶芽を採るために、最近、有機配合の利用率が高くなる傾向はみられる。生産目標に合った施肥設計が大切である。

本県における茶の生産目標は、10a当り1700kgで、その内容は、一番茶600kg, 二番茶500kg, 番茶2回で600kgとなっている。府県によって生産量の異なることは第1表の通りである。そのうえ摘採期、方法が異なり、品質、性情も異なる。

大体の品質の推定は、製茶歩留によって判定されるが、山間茶業では、一番茶22%以下が良質茶と云えるのではないだろうか。良質な生葉を摘採しないと、最近の嗜好対応に出来る茶は、製造出来ないといわれている。

上級茶の形態は何か。一般的には、外観と称せられる見栄と、内質、すなわち飲む液体の判定、つまり茶の浸出液を、水色、香気、滋味に分けて評価する。一般消費者は、総合的に一括判断をしているだけの事である。しかし価格決定をする、されるのであるから、慎重さがほしい。

表2 奈良県市町村別茶園面積

市町村名	茶園面積	荒茶生産量	栽培農家数	製茶工場
奈良市	364ha	720t	520戸	196工場
天理市	87	57	180	72
大淀町	36	72	50	12
山添村	386	1,133	744	223
都初村	193	191	525	90
月ヶ瀬村	213	777	230	46
室生村	82	75	106	29
東吉野村	40	81	70	5
その他	125	347	4,750	6
合計	1,526	3,453	7,175	679

(53. 奈良県茶統計)

外観とは、茶の姿であり、細く纏れていることが大切である。色合は鮮明な濃緑色で、光沢のあることが条件である。浸出液は透明の方がよいが、最近強く云わなくなったようである。水色は、やみ緑色で黄金色の強いもの、同時に光沢を伴うものがよい。

滋味は旨くて、濃さがあること、苦渋味の強いのは、欠点とされる。香気は味付のりの香り(ジメチルサルファイド)と、爽さが要求される。誰が飲んでも旨いもの、後味のよいこと、これは他の飲料にみられないことである。

5. 茶園の施肥と考え方

一概に茶園といっても、その生産量は第1表のように多種である。土壌にも砂質あり、粘質あり、土壌母材も花崗岩、安山岩、玄武岩等、組成の異なる条件下で、施肥という作業が行われている。その他、気象条件があり摘採期、方法が異なる、目的の緑茶も異なる。この事を知って、良質茶をつくらなければならない。茶業とは、考えれば考えるほど難しい、収益も上る農業である。

さて、筆者が体験した施肥量の歴史の中でも、10a当り45kgから60kgとなり、最近80kgに増量されたことを知っている。京都の玉露園にならって、有機質Nが主体となり、極端な例では、有機しか施用しない茶農家が、出る程である。

然し、自分達の茶園を見ると、いずれも異った条件下で栽培している。養分蓄積の時期、消費の時期、つまり茶芽の伸育期、生育停止期、根群の様子と、観察して、

ると、異なることが解る。施肥とは、茶樹の変化に応じて、養分の補給をすることである。

茶農家は、果実を収穫するのではない。植物体である葉を、収穫する。特に、新芽を好んで摘採する。これが茶業であることを、忘れてはならない。つまり、時期に合った施肥、時期、方法が大切で、効率のよい施肥法とは、茶樹を早く回復させる方法を見出すことである。

もう一つ、施肥で大切なことは、塩類集積による濃度障害を起さないことである。多肥栽培にまつわる事である。特に、よく見かけるのは、2～3年生幼木園で、早期成園化を願うあまりの結果のようである。

成木園でも、落葉という形で、よく見かける症状で、永年作物である茶には、一生悪い結果を残す。濃度障害は、土質、気温、降水量、蒸散量によって異なるが、施

用量、肥料の種類によって発現すると思えばよい。

別表E C値の月別変化、表-3のような状態が、茶園の土中で進行している。地形、地質等にもよるが、茶樹では1回にN量20kgが限界のようである。

筆者の施用量試験でも、10a当りN24kg施用区は、地際の細根部に枯死症状を呈した例がある。また筆者等が行った、茶樹の年間月別根群生育調査も、参考にしてほしい。

つまり摘採が行われると、細根の伸育が始まる。11月になると、根の伸育は休止することも、知っておく必要がある。その他、芽出し肥え、色付肥えという言葉がある。良質茶の生産を考える場合、利用すべき施肥慣行と思われる。

表3 茶園における E C の 変化 (m v)

月 肥料名	3	4	5	6	7	8	9	10	11
菜種粕	0.13	0.18	0.13	0.15	0.17	0.26	0.27	0.36	0.32
S一化成	0.44	0.26	0.40	0.26	0.52	0.32	0.69	0.66	1.43
有機配合	0.32	0.18	0.34	0.21	0.53	0.24	0.48	0.48	1.94
CDU化成	0.32	0.24	0.33	0.16	0.45	0.22	0.57	0.41	1.15

(注) 奇数月にN=20kg/aを施用した。

土壌 三紀層 粘質壤土

(奈良県茶分察)

表4 茶樹根群の月別増加量 (根数)

月 調査	3	4	5	6	7	8	9	10	11
切断1ヶ月後	0	0	13.5	6.25	5.5	14.0	18.2	0	0
" 2	4.0	8.0	12.7	6.5	17.2	18.2	20.5	3.0	0
" 3	12.0	8.7	17.0	15.5	18.2	16.0	19.5	11.0	
" 4	11.5	10.5	16.5	12.3	16.6	14.0	19.5		
" 5	11.0	12.5	14.0	16.0	14.6	17.5			

(奈良県茶分場)

54年度の麦、大豆、荒茶等の生産状況

農林水産省が公表した54年度の麦(4麦)と大豆および荒茶の生産状況は次の通りである。

(1) 麦(4麦)の作付面積は、麦生産振興対策や水田利用再編対策の推進などで、前年に引続き大巾に増加し26万4,600ha(前年比27%増)となった。田畑別では田作が36%増加して16万9,200ha、畑作は主に北海道の増加から15%増加して9万5,400haとなった。種類別では小麦は33%、6条大麦39%、2条大麦は20%、裸麦は10%それぞれ増加した。

収穫量は、全般的に天候に恵まれたため、前年を更に上回る作柄となり、4麦全体では前年に比べ37%増加した。

(2) 大豆の作付面積は、畑作が前年を2.7%下回ったが、田作が7.7%上回ったため、全体では前年を2.6%上回る13万0,300haとなった。

収穫量は、作柄は比較的良かったものの、北海道における前年の作柄が良かったことから、全体では前年に比べ1.0%増となった。

小豆、いんげんは減少し、らっかせいは増加した。

(3) 荒茶の生産量は4、5月の凍霜害で、静岡、埼玉、京都など生産県の一歩茶が、前年に比べて大きく減少し、また、樹勢回復のおくれから、二歩茶も前年を下回った。このため、全体では前年をかなり下回るとみられる。

55年度春野菜……なお55年度春野菜の作付面積は増加傾向にあるレタス、前年の価格が堅調であった春夏にんじんが、わずかに増加するとみられるが、多くの作目ではほぼ前年並みとみられ、春野菜全体でも、ほぼ前年並みとみられる。収穫量も天候が順調に推移すればほぼ前年並みとみられる。